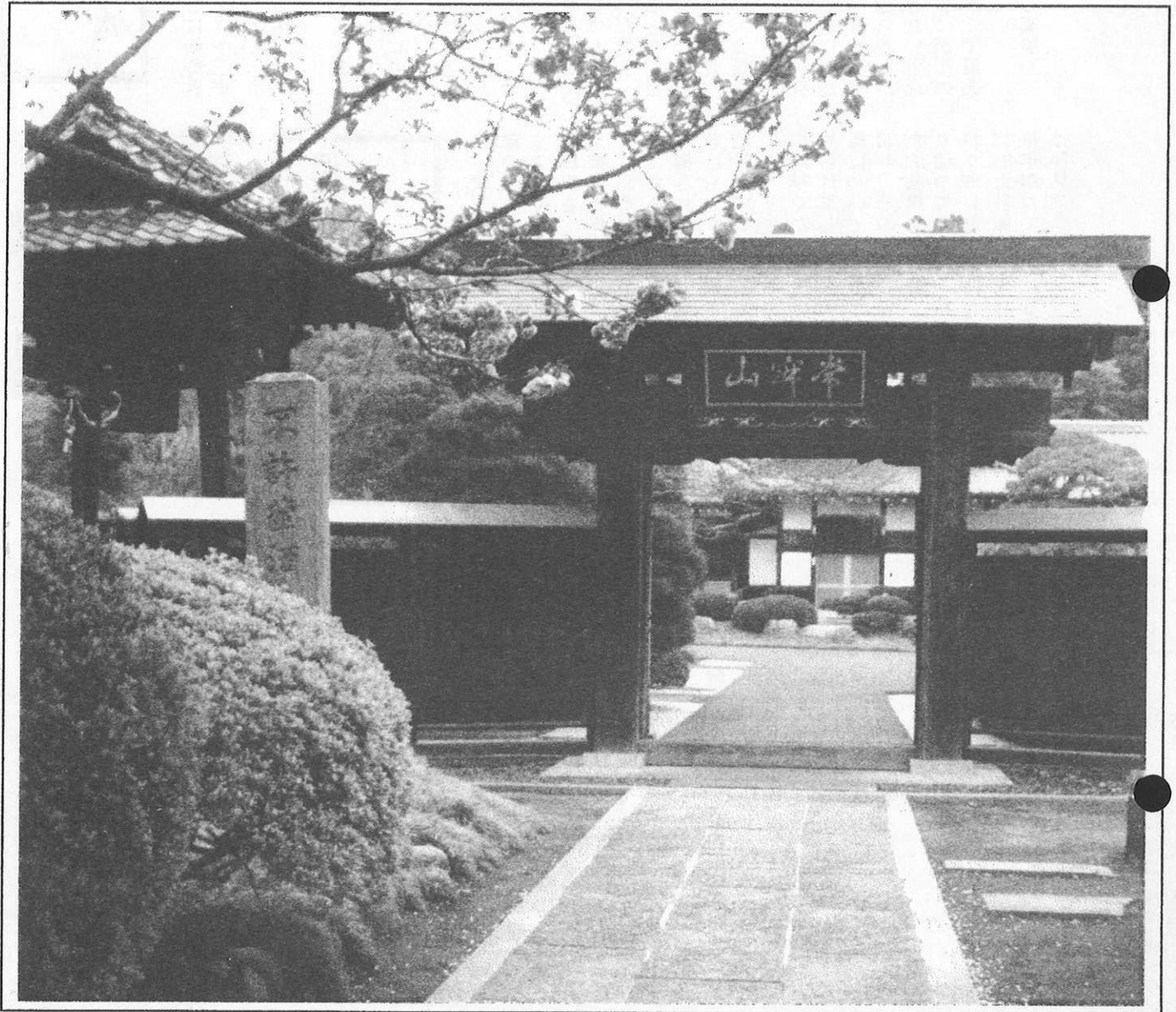


御土はんのう

第22号



- | | |
|-------------------------------------------------|---------------------------------|
| ◆岡野君を憶う(井上峰次) 2 | ◆茗字と地名(青木晃平) 4~5 |
| ◆追悼 岡野達雄さん(坂口和子) 2 | ◆黒田氏と飯能(浅見徳男) 5~7 |
| ◆伊勢参宮道中日記簿(増岡正文) 2~4 | ◆私の正月(浅見初枝) 7 |
| ◆Q子ちゃんとAおじさんの
飯能の歴史おもしろ問答(吉田靖) 2~7 | ◆ますますの枡(田嶋和子) 7~8 |
| | ◆新年度事業計画(案)、郷土史研だより 8 |

郷土はんのう

岡野君を憶う

井上 峰次

信じられない知らせとは、まさに岡野君の訃報をいったものに思えた。平成十三年十二月九日、心臓疾患によるどうかがあったが、偉丈夫な達ちゃんがなんで・・・という想いは、今も続いている。

達ちゃんの多趣味で凝り性は多くの知るところ。早大を卒えて短期の勤めをした以外は、自由な生活がその趣味を本物にしたと思える。それに「家族と早苗夫人の理解」と「おし」が大きな支えになっていた。歴史と刀剣を軸とした文化財と、飛行機。また絵画スケッチにはとくに注力して、多くの絵馬類を残している。

郷土史研にも惜しみなく情熱をそそいでくれた。また副会長として貢献してもらったのは周知のこと。会の事業だった発表、案内、報告、編集などを担当すると、綿密な準備と労を惜しまなかった。また型にはまるのがキライな彼は、総会の時の説明などは型破りで、さっと切り上げ、会員をアツと言わせたこともあった。

博学多才な彼の急逝は、飯能の歴史研究にとって大きなマイナスであると共に、地域にとっても、かけがえのない個性を失った穴は埋めようもない。とくに達ちゃんがライフワークとして取組み、書きたいと念願していた「早苗夫人談」「黒田直邦」が陽の目をみながったことは、かえすがえす無念でならない。

舌足らずだが、岡野達雄君のご冥福を祈り筆を措く。



故岡野達雄氏

追悼 岡野達雄さん

坂口 和子

平成十三年十二月九日、岡野さんは五十一歳の若さで私たちに別れを告げられました。まことに残念でなりません。

岡野さんは古今東西の歴史に通じ、美術工芸の世界に通じ、あくなき追求心をもって、お若いころから、自分の世界を確立されておられました。その多才、多能ぶりを発揮されて各処で活躍され、飯能の文化行政にも大きく貢献されました。刀剣のこと、飛行機のことに関しては何の追隨を許さないキャリアの持ち主でした。郷土史研究会には早くから所属され、副会長を二期つとめられました。十二月の定例会で「飯能の絵馬について」をお話くださったことになっており、そのための資料やご自分で制作された大絵馬をおもちくださるといわれて、はり切っておられ、私たちもたのしみになっておりました。定例会の十二月十三日を目前にした訃報に、まことに驚いた次第です。毎年作っておられる千支の絵馬を、ことは拝見できませんでした。

豊かな感性を秘められたユニークなお人柄をしのび、心からご冥福をお祈りいたします。

伊勢参官道中日記簿

増岡正文

上直竹分の木崎家に残されている『伊勢参官道中日記簿』は、当主の祖父に当たる木崎熊次郎が、明治二十五年一月二十五日から二月の二十七日にかけて伊勢神宮にいったときの三十四日間の記録である。

この日記簿は半紙を縦に二つ折りにしてとじたもので、無論、毛筆書きである。旅の期間中の一日毎の記録は、日によって詳細に書かれたものや、ごく簡単に書かれたものなど、詳しさには差があるが、当時の旅の様子が偲ばれて極めて興味深い貴重な資料である。

その日記は例えば次のようなものである。
『一月三十一日
静岡ヨリ掛川迄汽車乗ル金三十銭此間吾
倍川大井川ノ二川アリ汽車道ノトン子リ
四ヶ所アリ是ヨリ秋葉街道回り
中飯
森町
大黒屋源五郎
森町ヨリ道路開鑿秋葉麓下迄是レハ県廳
ノ開鑿ナリ大居天龍川源二架スル橋凡長
サ八拾五間ナリ
泊リ
秋葉麓下
高木屋安兵衛』

東海道本線が全線開通したのは明治二十二年であり、開通時には一日一往復であったというが、三年後のこの時は何往復だった

Q子ちゃんとAおじさんの

飯能の歴史おもしろ問答

(その3)

命がけて行動した

農民たちの「一揆」

▼Aおじさん：これまでは「飯能の歴史のはじまり」と「飯能の武士団」について二回にわたって話してきたが、三回目のきょうは飯能近辺で発生した「イッキ」について話そうと思う。

▽Q子ちゃん：え、イッキ？

▼Aおじさん：そうイッキの話だよ。

イッキといつてもピールのイッキ飲みじゃあないんだ。封建社会の鎌倉、室町、江戸時代の武士支配の数百年、農民などが生活の困窮に耐え兼ねて集団で決起、権力に立ち向かう、多くの場合、暴動に発展するが、そうしたことを一揆(いっき)と言うんだ。

▽Q子：なんだ、そうだったの。飯能でもそうした一揆が起きたというわけ。

▼Aおじさん：そうだ。飯能ばかりでなく全国至る所で発生したんだよ。

その数は数万人、数十万人の大規模のものまで大小数千件というから凄い。

▽Q子：ということは、その時代の人々の生活は貧しいというより生死にかかわるほどの極貧状態だったということかしら。

▼Aおじさん：そのとおり。農民たちが奉行や領主に訴えた訴状から見てもそのことがわかる。

のだらうか。

吾倍川はおそらく安倍川、トンズリはト
ンネルのことと思われる。全体を通してこ
のような当て字や、漢字の誤用も散見する
が、反面難しい漢語なども使われているの
は、庶民の読み書きの力がかなり高かった
ことをうかがわせる。

また、熊次郎は真つすぐに伊勢を目指し
て急ぐのではなくて、秋葉神社に参詣し、
次の日には鳳来寺山を越えて、豊川稲荷ま
でお詣りしている。驚くばかりの脚力であ
る。

二月六日

小休

六軒町

江戸屋清五郎

津町河内屋ヨリ明星駅三田屋迄馬車乗ル

中飯 明星駅

三田屋三郎兵衛

明星駅三田屋三郎兵衛迄出迎ニテ神酒ヲ被
下是ヨリ人力車目印旗ヲ立伊勢山田岩瀨町
三田市太夫二郎玄関迄人力車乗込ニテ午後
四時着仕候也

泊り

伊勢岩瀨町

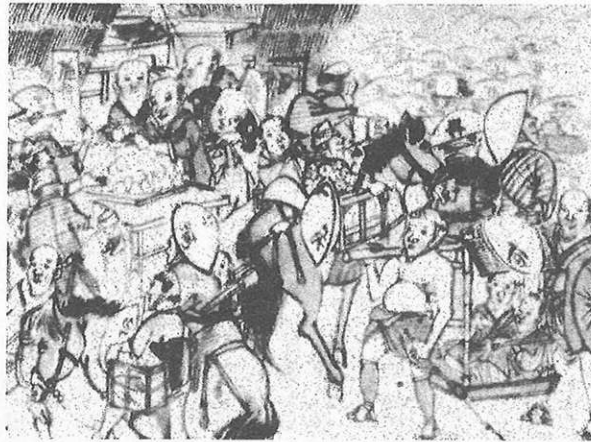
三田市太夫二郎

熊次郎は伊勢参宮の期間中、この三田市
太夫二郎方に滞在するが、これはおそらく
伊勢神宮の御師であろう。熊二郎の住んで
いた上直竹上分は伊勢講がさかんであり、
おそらくこのついでの伊勢参りであったと
考えられる。

とにかく、目印の旗をたてた人力車で御
師宅の玄関に意気揚々と乗り込むのは、講
の代参という格式があったからと思われる。

なお、講の代参の場合、一人だけにな
く複数の者が参加するのが普通だと考えら
れるが、この日記を見る限りでは熊二郎に
同行者はいない。この伊勢参宮を終わって
家に帰ってからの支出の中で、風呂敷三十

三枚を買ったという記録があるので、ある
いは講の人数としては少ない方、でこのた
め経費節減の意味での単独行であったので
はないだらうか。なお、上直竹上分とい
う地域は現在では戸数は減少しているもの
昔からおよそ三十数戸であった。
熊二郎は六日に伊勢に到着し、内宮、外
宮などに参詣し、十一日に三田市太夫二
郎方を出発している。五日間ここに滞在
していたことになる。



しかし、ここから真つ直ぐ村へ帰るの
はない。代参という大役を済ませたので名
所見物、神社仏閣詣りが行われるのである。

十二日、青山峠を経て伊賀越え、十三日、
奈良へ出て先ず永谷観音へ詣で、十四日に
は三輪神社から春日神社さらに大仏を拝見
している。十五日には法花寺(法華寺)、西
大寺、法立寺(法隆寺)から生駒にまわり、
竜田川、当麻寺などに参詣し、十六日には

神武天皇陵、橘寺、多武峰談山神社を経て、
吉野山蔵王大権現さらに吉水神社を見て高
野山に向かっている。
十八日には高野山に至り山中を見て回っ
て高祖院に泊まり、十九日高野山を下りて
和泉山脈を越え大阪に出、二十日は住吉神
社に参り、二十一日、大阪見物、午後到大
阪港から汽船に乗り込み、翌二十二日早朝
多度津港に着、金刀比羅宮から普通寺に参
詣し、夜船にて神戸港から大阪港に着き、
今度は京都見物となる。二十三日は降雨の
ため宿にて休息、二十四日には西本願寺、
清水寺、祇園八坂神社、知恩院、京都御所、
二条城などを巡り、いよいよここで帰路に
就くことになる。

十一日伊勢を出立してから十四日間、
せっかく出て来たのだからと欲張って各地
の名所旧跡を見て歩きたいのは理解できる
が、これでは伊勢参宮はそっちのけとい
う感じがしないでもない。

交通機関を利用したのは大阪、多度津間
の船だけで、あとは専ら二本の足を頼りに
歩き回っていたと思われるが、今考えると
ギリギリの暮らしたことが分かる。
想像もできないほどの健脚である。もつと
もこの時代、これが普通だったのかも知れ
ない。

二十五日

是ヨリ京都テイ車場ヨリ五時五拾式分發
車致シ美濃国大垣迄九時十四分三着仕致
ス但車賃六十六銭ナリ

美濃国

角又村亀屋

但シ大垣角又辺震害ニ付キ誠ニアハレム
ベシ

木曾川ヨリ午後四時五分汽車乗リ午後八
時浜松着仕車八十一銭

泊り

浜松町停車場前

(2ページより)
▽ それで飯能で発生した一揆というの
はどのようなものだったの？

▽ A おじさん：飯能に関連した一揆は、
江戸時代の宝暦十二年(一七六二)に発生し
た多摩地方を中心とした「田安領箱訴事件」
と明治維新直前の慶応二年、名栗村を起点
に発生した「武州世直し一揆」、それに浅間山
大噴火の年、天明三年(一七八三)に発生した
と伝えられる「高麗郡一橋領一揆」の三件が
あったとされている。今日はその中の多摩地
方田安領一揆について話そうと思う。他の二
件はまたの機会にしよう。

▽ Q 子：、「田安領箱訴事件」ってどのよ
うな事件だったの。

悲惨だった田安領
農民の決意と行動

▽ A おじさん：田安領は青梅付近の多摩
郡に多く三十四力村に達していたが、飯能な
ど高麗郡内にも岩瀨村、阿須村、笠縫村、
中藤村(以上現飯能)とか下鹿山村、(現日高)
など二十四力村が田安領になっていた。宝暦
一年(一七六一)四月のこと、その田安藩の郡
奉行・竹内勘左衛門は代官の岡本 右衛門
など数人を同道、何か月かにわたって各村々
を検分、各名主に「年貢の増量」を下命した。
(「青梅市史資料編『田安領宝暦箱訴事件』よ
り)

下命内容を見てびっくりした農民たちは田
安領内でも特に凶作で苦しんでいた山村の
二十力村代表たちが集まり、対策を話し合っ
た。話し合いの内容は、

① 年貢の増量は名主たちが無理やり諾
書に捺印させられたもので、減免してもらわ
なければとても納められない。減免願いを実
施しよう。

② 減免行動しても、たやすく認められ
(4ページ下段へ)

油屋才兵

京都から大垣まで汽車で三時間二十二分
かっている。汽車のない時代にあつてはこ
れは驚異的な早さであつたらう。

大垣辺の震害というのは明治二十四年十
月二十八日に発生した濃尾大地震のこと
である。全壊焼失家屋十四万二〇〇〇戸、死
者七二〇〇人の大きな被害を生じた大災害
からまだ四ヶ月ほどしか経過していないの
で、その惨状をまだ目にすることができた
のであろう。

二十九日着、参宮道中に要した経費は、
この道中日記簿の別記によれば総計、三十
八円四十銭と記録されている。当時の物価
からみてこの金額が高いか安いかは即断で
きないだろう。

一月の下旬から二月にかけての旅であつ
たということは、なにも冬の寒い時期にと
も考えられるが、忙しい農繁期を避けての
結果だと考えれば納得がいく。

まだまだこの日記簿の内容などには研究
調査すべき内容、あるいは疑問を含んでい
るができれば今後それを解明できたらと思
う。

この日記簿をみて思うことは、たとえ断
片的で、稚拙(これがそうであるというも
のではないが)なものであつても個人のこう
した記録は、公的な記録以上に貴重な歴史
資料、あるいは民族資料になり得るとい
うことである。

(敬称を略させていただいた)

飯能郷土史研究会

会員募集中

苗字と地名

青木晃平

苗字も地名もおこりは、どちらが先
か定かでない。人々が集団生活するよう
なつて不便のために付けられたであらう。
元となる土地、本郷とか元村より西に出
て、西川を名のり、北に出て北村、南に出
て南郷、南條、東に東郷、東條を名のつた
りした。しかし「郷」の村が出来たのは室町
時代の郷村制の発達によるものである。苗
字のおこりは古く、たいへんむずかしく平

安中期以降とみられ、氏や姓(かばね)が整
理統合されて源氏、平氏、藤原氏、橘氏外
数氏になり、数が多くなり区別に居住地名
を付けた。地方豪族なども根拠地の名を苗
字としたものが多く、関東武士が各地に移
住してその苗字が広がった。もともと中国
より朝鮮半島から日本へ広まったと言われ
その苗字は中国が五百、韓国が百五十から
三百、日本は何と十二万から十三万と言わ
れている。使用文字により

- ① 天体に関するもの、
 - ② 数字を使用したもの、
 - ③ 方位に関するもの、
 - ④ 動物名を使用したもの、
 - ⑤ 植物名を組み入れたもの、
 - ⑥ 色彩別文字のもの、
 - ⑦ 宗教に関するもの、
 - ⑧ 財産に関するもの、
 - ⑨ 職業に関するもの、
 - ⑩ 器物から付けられたもの、
 - ⑪ その他いろいろの理由で付けられた。
- 次に大姓を比較して見ると、全国一位よ

り十位まで佐藤・鈴木・高橋・伊藤・渡辺・
斎藤・田中・小林・佐々木・山本となる。
飯能市一位から十位まで大野・加藤・新井・
鈴木・浅見・小島・島田・町田・小林・清
水となる。

次に地名と姓氏に多用される文字の比較
(姓氏一位より十位まで)。田・藤・山・野・
川・木・井・村・本・中となり、地名一位
より十位までは川・田・大・山・野・島・
東・津・上・原となり、大姓の場合は鈴木・
小林が全国、飯能市とも上位にある。

次に飯能市の大姓分布状況一位から十位ま
で。一位・大野は旧吾野、東吾野に多く、
加藤は旧飯能・旧精明、三位新井は旧精明、
旧飯能と旧加治。四位鈴木・旧精明、旧加
治。五位浅見・旧吾野、旧飯能。六位小島・
旧精明、旧飯能。七位島田・旧飯能、旧精
明。八位町田・旧精明、旧加治。九位小林・
旧飯能、旧加治。十位清水・旧飯能、旧加
治となり地区は一位二位をあげた。

大野・浅見姓は吾野・東吾野が多く、他は
旧飯能・旧精明、旧加治が多い。埼玉県は
他の県にくらべて新井姓が非常に多いと言
われている。これは武蔵野の荒地が新しく
開拓されて井戸が必要であり、そこに住居
をかまえて荒井、新井・新居等の若字とな
ったと言われている。全国地名の一割が苗
字にあり、古代地名の六割が今に残り、そ
の多くは祖先の居住地の地名と関連をもつ
ているという。それは現在の子孫の土着し
ているもの、祖先の居住地の地名の苗字の
人が移り住んだものなどある。東京には全
国苗字の九割の人が住んでいる。昨年、飯
能の小字名の主なものを調べてみた。一位
より三位まで(地区別)

- (イ) 沢のつくところ、吾野十九、原市場十
七、加治十三
- (ロ) 久保又は「窪」原市場四十五、吾野十九、

(3ページより)
は考えられない。村々の力だけで運動が統
けられるか。どのような行動を起したら
よいのか。

③ 行動する場合、家庭の事情などにより
参加できる者と出来ない者が出る。どの
ようにして均衡を保か。また犠牲者が出た
場合、その家族をどのように守るか、以
上の三点。

協議の結果、次のようなことが決まった。
① 下命を受け入れても餓死する。訴え行動
しても死。同じ死ぬなら何もせずに死ぬより、
我々の窮状を訴えて死ぬの方が意味が
ある。

② 運動は何年かかろうとも目的達成まで続
ける。
③ 禁令行動であり逮捕者・犠牲者多数が見
込まれる。行動に参加したり逮捕されたり、
犠牲者が出た場合はそれらの家は村の五人
組組織によつて守る。そのためには村人同士
の喧嘩口論を慎み、火災防止に努めなけれ
ばならない。(飯能市岩淵の小見山家文書村
人の連判状より要約)

▽ Q子：その申し合わせ、すごいね。年貢
の減免が受け入れなければ多数の犠牲者が
出ようと、何年かかろうと運動を続けるとい
うのでしょ。その固い決意、私には想像もで
きないわ。

▼ Aおじさん：Q子ちゃん、よくそこに
気がついたね。その固い決意どおり、すると
「代官の言うことを聞かぬとは不届き、訴訟
運動は開始された。宝暦十一年(一七六一)
十一月、田安領の下成木村、小曾木村(現青
梅市)岩淵村(現飯能市)など約二十力村の農
民代表(名主・組頭)が代官所に出向き村人の
窮状を訴えた。すると翌年二月、代官から
名主・組頭に呼び出しがかり、出

郷土はんのう

(ハ)「谷戸」のつくところ原市場十、加治三、飯能三

(ニ)「入」のつくところ原市場二十四、吾野十三、飯能三

(ホ)「日向」「日影」のつくところ原市場六、吾野三、精明二

(ヘ)「原」のつくところ加治十二、精明六、飯能四

(ト)「田」のつくところ精明五、加治四、原市場三

(チ)社等に関係のところ加治七、原市場六、飯能・精明五

沢と久保・窪・谷戸のつくところは山の方
に多く日向・日影が意外に少なかった。原
市場はほとんど上位三位の中についでいる
ので非常に地名の多い所と感じた。

めずらしいのは南高麗の光福「コウフク」
(幸福に関係あるか)、東吾野の智房「チブ
サ」(乳房に関係あるか)興味のある地名で
ある。地形等調査したいと思う。

加治地区の苗字と地名
加治地区の苗字と小字名が関係して古く
より住んでいたと思われるのは落合清水の
清水一族と矢風滝沢の滝沢一族だけである。

大字岩沢の岩沢一族は地名に関係あると思
われるが外にはない。旧加治村に加治姓の
人は二十年前の調査では無かった。

「岩沢」…字の如く湧水地を持つ家が約二
十戸あり地名となり、代表若字小林・西野・
西村・田淵・青木・岩沢・雨間・沼井・浅
野・岡野・双木・内沼・島田・清水・小峰・
神山など。

「笠縫」…笠縫部に関係あるかさだかでは
ない。元龜・天正の絵図に「堀米村を割って
笠縫を生ず」とあり中山村の一部であった
と見られる。代表苗字島崎・内沼・青木・
鈴木等。

「川寺」…もと奥ヶ谷村と川貫村(下川寺)を

一つにした、川と平地の説があるが寺が多
かったことからの地名と思われる。代表苗
字相田・土屋・小高・安藤・小山・鈴木・
町田等。

「阿須」…崖の崩れた所の意味より生まれた
地名で神奈川県、茨城県にもある。

古代古戦場としての地名…陣峰、一の木
(一の木戸)、要害沢があり鉄に関係の黒金
沢。飯能地区の河川の砂鉄調査によると砂
鉄が非常に多く、この名が付けられたであ
らう。代表苗字山崎・山岸・小島・鈴木等。

「落合」…入間川と成木川の合流した所。川
合・川又も同じ。落合姓がないのが意外
である。代表苗字大久保・清水・小島・奈
良など。

「前が貫」…地名は前が貫けている。山の崩
れた所か。伝説の矢が貫けた場所か。古く
は「しようがあ」と呼んだ塩川寺があつて附
近は酸性が強く、「マグサビ(馬具錆)」の地
名もある。代表苗字渋谷・大沢など。

「矢風」…征矢神社の伝説による矢を射た
土地が矢風か。おろしは崖、矢は岩の意と
もい地形に由来するか。代表苗字・佐野・
岩沢・木村・新井・滝沢・元木などがある。

めずらしいのに鈴崎がある。鈴木・木崎
の姓を一緒にして鈴崎を苗字としたという
明治の初期のことで、政府は税金と徴兵を
当てこんだ国民皆姓の令により苗字を届け
出した頃のことである。

珍・難姓

十二仏(オチブルイ)七寸五分(クツワダ)八
道(ムサシ)一口(イモアライ)十八女(サカ
リ)二デカタ・ハジメ)四十八願(ヨイナラ
譚(イナビ)倭文(シトリ)ヤマト)勘解由小路
(カゲユノコウジ)カデノコウジ)
おもしろい地名我孫子…千葉県我孫子
市・大阪市我孫子町

地名…静岡県羽榛原郡中川根町
十八女(サカリ)…徳島県十八女(さかり町)
ぼんと町…京都のぼんと町
加須(カノ)埼玉県加須市
膝折(ヒザオリ)…埼玉県朝霞市
脚折(スネオリ)…埼玉県鶴ヶ島
十々六木(トドロキ)…埼玉県秩父郡(たし
算)

百々(トド)…岡山県苫田郡(かけ算)
参考図書 『姓氏の語源』丹羽基二著(祥文
堂) 『古代地名語源辞典』楠原佑助ほか(東
京堂) 『地名の由来』吉田茂樹著(新人物
往来社) 『地名の語源』鏡味完二・鏡味明
克著(角川書店) 『姓氏』丹羽基二著(秋田
書店) 『飯能市史』飯能市史編纂委員会



黒田氏と飯能 浅見徳男

「この国のかたち」という言葉は、司馬遼
太郎が文藝春秋に連載したエッセーの標題
であったが、ここでは「飯能」というまちの
形をつくった黒田直邦という人物と、その
系の人たち、そして治績や飯能との関係を
辿ってみたいと思う。

徳川家康が江戸に入って間なしの、今か
ら四百年ほど前のこのまちを想像すると、
入間川沿いの数ある小さなまちのひとつで
あったことがわかる。

徳川が開幕して政権が安定してきた正保年
間(一六四四〜一六四六)に幕府は領地の実
情を知るべく、武蔵国全域を調べそれを『武
蔵田園簿』(別名『正保田園簿』ともいう)
という形でまとめている。

(6ページ上段へ)

(4ページより)

頭すると「代官の言うことを聞かぬとは不届
き、二名に手鎖、他の者は江戸大塚屋宿に
身柄預かりとする。」と申し渡されてしまっ
た。運動開始と同時にこの事態に村人たちは
弾圧は当初から予想されたものとするはず
「代官が駄目なら、その上に郡奉行がいる」
と奉行竹内助左衛門に訴状を提出した。と
ころが奉行「そのようなもの受け取れぬ」と
門前払い。こうなつたら名君の名高い田安
公に訴えるしかない、家老・山本筑前守へ
お願いに参上する。こうして二十九村の苦難
に満ちた徒党強訴のたたかいが本格化する。
農民たちの動きは幕府も注目していたと見
え、『徳川実記』にも「村々への賦課を申し渡
したが百姓これに應じず、四ツ谷の別邸に群
衆して訴えなげき…云々」とある。

▽Q子…農民は大変な苦勞をしているの
に、なかなか思うように理解してもらえない
ものなのね。で、田安公は農民の訴えを、ど
う扱ったのかしら。

▼Aおじさん…数日後、家老よりお触れ
が届けられた。その内容はと見ると「名主
組頭が承諾した年貢について村方申し合わ
出訴に及びしはなはだ不届き。その事情につ
いて吟味する。二日影和田村・和田家文書と
の内容。百姓の言いは全く聞き入れていな
い。村人は直ちに代表五人により再び家老に
出訴したもの全員が捕まってしまった。が、
農民たちはあきらめることなく更に訴えを
続けた。そのたびに捕らえられるため、すで
に多数が帰村できなくなっていた。それでも
農民のたたかいは続いた。「田安の殿様が駄
目なら、その上の將軍様がおられる。しかも
庶民の声を聞くという目安箱(投書箱)制度
もある。これを利用して」ということで、徳
川幕府へ何回かにわたって直接箱訴した。と

(6ページ下段へ)

その飯能市域をみると、中山は「町」飯能は「村」という標記になっている。

中山は智観寺の中山家季、助季の板碑に見るとおり、中世から中山氏(加治氏)が本拠としたところで、そこに館を構えて家の子郎党を周囲に住まわせ、ひとつの集落が形成されたところである。自然と繁華となり、周辺地域の中心となり市が開かれるようになったのであろう。

ところが、正保から四十年ほど経った天和元年(一六八一)に書かれた一枚の質地証文を見ると、飯能村の某から飯能町の某へと宛名が書かれている。これは何を表しているのかというと、飯能・久下分・真能寺の三か村に跨って、市場まちが形成されていたことを示している。そして、中山の標記はその頃から村と変わっている。

この地方の中心が、中山から市場の総称である飯能へ移ったことを示しているのだからあろう。その原因として考えられるのは、自然地形や地理的条件が考えられる。ここは入間川の谷口にある台地上であり、林産物を河川で運搬するという当時の方法から格好の位置にあった。また、江戸から秩父を経て、甲州への甲州裏街道の中継地で、地理上も重要な位置にあった。しかし、これらの条件にも増して、能仁寺の存在を考えないわけにはいかない。中山に本拠を置いた中山氏が、中世末期に能仁寺を創建したことによる。

中山家勝は、各地を巡歴していた名僧斧屋文達を招いて、能仁寺を創建したという。家勝が天正元年(一五七三)に没して、その子家範が父の霊を弔うために伽藍の建造をし、今の礎を築いたという。家範の長男照守は江戸幕府に仕えて、能仁寺を菩提寺とし、親子三代の墓は西の墓地にあって、飯能市の文化財に指定されている。

この照守の系で、三代後に中山藤兵衛直張という人がいる。この人の三男が黒田直邦で、この小文の主人公である。直張の奥方は上州館林藩の家老黒田用綱の娘で、直邦はその祖父に養われて、黒田姓を名乗ることになった。そして、父祖の地である能仁寺を菩提寺としたのであった。



黒田直邦像「能仁寺蔵」

延宝八年(一六八〇)、綱吉が將軍職を継ぎ江戸城に入ると家臣団も幕臣となって綱吉に従うことになった。吉保は御小納戸、直邦は小普請という役職であった。

元禄四年(一六九二)、二十六歳になった直邦は、側用人として権勢を奮っていた柳沢吉保の養女土佐子と結婚した。これは將軍のお声がかかりであったという。

將軍綱吉、柳沢吉保、黒田直邦と、親密な関係ができていた。綱吉は在職中柳沢邸を五十八回訪問したというが、黒田邸へも訪れた記録が数回ある。

ある時、將軍御不例(病氣)に直邦を通じて能仁寺住職泰州が呼ばれ、般若経を転読したところ、病気が癒えたという逸話が残

っており、能仁寺も將軍家とつながりをもった。現在、本堂と山門に懸かっている「能仁寺」「武陽山」の額も、將軍のお声がかかりにより、天台座主公辨一品法親王が書いて、奉納されたものだといわれる。また、能仁寺所蔵の元禄十五年(一七〇二)の文書「將軍家御成二付諸事覚書」には、黒田邸へ將軍が訪問した折、住職も招かれて、その折の詳細が書かれている。黒田邸の様子、人の動き、贈答の品、論語講釈のことが記録されている。

このようにして、將軍家、吉保、直邦、能仁寺と、歴史の糸で結ばれたが、このことが飯能地方の発展に大いに寄与している。綱吉より吉保は十二歳若く、吉保より直邦は八歳下であったが、ともに綱吉の信頼を得て、最終の処遇としては、吉保が甲府城主十五万石となり、直邦は沼田三万石城主となった。

しかし、吉保が政治の権謀術教の中で出世したのと異なり、直邦は学者肌であったようで、荻生徂徠の弟子として儒教の勉強をしたり、林羅山に始まる儒官の人たちとも親交があったことから、政争に巻き込まれることなく、綱吉亡きあと家直、家継、吉宗と、四代の將軍に仕えたことになる。

能仁寺はそのような直邦の尽力もあって江戸時代初期に家康から下賜された寺領五石の御朱印が、宝永二年(一七〇五)に五十石と改められ、この地方の中心的な寺院となった。朱印の十倍増とともに、翌宝永三年には、伽藍の修復のためとして直邦が金百両、米百俵を寄進している。

それを受けた能仁寺は、早速伽藍の修復を行い、その後叢林(修行道場)としての許しを得て、一時は五十人ほどの修行僧が居たという。住職は乗輿の格(輿に乗る資格)になり、近在では格別の地位となった。そし

(5ページより)

ころが、箱訴の内容は將軍様の外には漏れることはないはずなのに、箱訴のたびに訴人が捕らえられてしまう。実は訴状内容が田安家に筒抜けになっていったんだ。箱訴は実に九回にわたって行われた。このため幕府による吟味という状態にまで持ち込むことに成功した。

百姓には曖昧判決奉行代官には手心▽Q子：幕府吟味の結果どんな判決が言い渡されたの？

▼Aおじさん：判決文によると百姓に対しては「雑木林や宅地分の増税は取り止め、田畑については田安藩において再吟味。集団出訴の不届きについては所払い(居住地からの追放)八名(うち六名牢死)、田畑没収一名(牢死)手鎖百十八名、お叱り十一名、無罪三十八名(うち牢死一名)となった。一方農民と直接対峙した奉行や代官については「百姓どもの不平不満の騒ぎを直ぐ報告せずいざずらに騒ぎを大きくした責任は大きい。よって役職取り上げとする」との判決。しかし古文書によると何年か後、奉行らは再び別の要職についたという。

▽Q子：一般的な一揆と違い、暴動など起こさなかったのに、それにしては「いぶん沢山の犠牲者がでたのね。で、その判決、村の人たちは喜んだのかしら、それとも悲しんだ？

▼Aおじさん：一部の農民は少しではあつても減税されたこと歓迎したらしいが、大方は肝心の田畑分の減税があいまいであり、再び増税されるかもしれないと不満だったとみえ判決後も代官所に伺いにたずねている。しかし判決前に十二名が拷問などにより死亡している。

(七ページ下段へ)

て、領民の願いごとの領主への仲介や町での争いごとの仲裁など、飯能地方の重立として、特別の位置を占めていた。

享保二十年(一七三五)三月黒田直邦は没し、多峰主山の頂上近くに葬られ、飯能の殿様として立派な墓が築かれた。そこには狹右生徂徠の弟子で、生前の直邦とも親交のあった儒学者太宰春台の銘文が刻まれた大きな石碑が建てられている。

直邦の後を継いだ直純は、幕府の命によって、沼田から上総の久留里へ移封することになった。移るに当たり、城の修築費用として幕府から五千両という多額の助成金が下賜されている。

黒田氏は、この久留里城の主として、幕末まで藩政を執り行い、代々の藩主が能仁寺を菩提寺とした。

黒田家初代の直邦が、先祖の地へ思いを寄せたことが、代々の藩主に引き継がれ、明治を迎えるまで黒田家にとつても、飯能は特別の地であつたろうと思われる。飯能の人たちも、領主の菩提寺参詣や葬儀などの折々に、村をあげて奔走している。

領主と領民、支配と被支配という立場以上のものを、飯能の人々が感じていたことを、残された資料が語っている。

私の家の正月

浅見初枝

十二月三十日に門松をたてて、神棚に飾りして、お正月を迎える準備が始まる。私の家では大晦日は年越しそばではなく、

ご飯とけんちん汁と決まっている。

荒神様に一年の無事を感謝し、ご飯を団子にしたものを火にくべる。昔は囲炉裏があつたので、囲炉裏にくべたのだが、今はガスコンロの一番小さい所に乗せて焼いている。

また仏様には、茶碗に山盛りのご飯をよそり箸を二膳さして供える。そして線香をあげて手を合わせたあと、仏壇を開けていたが、十七年前に舅が亡くなってからは、正月も開けている。

一日の朝は、お灯明をつけ、お神酒とお供え餅、芋と大根と小松菜の雑煮を神の鉢にのせて、神様にお供えする。神棚に天照皇大神宮をはじめとして三神、ほかにえびす様、おかま様、井戸神様、山の神様、若宮八幡様、春日様、車庫と全部で十一か所ある。また門松にも雑煮等を供える。

夕飯は、うどんを打って供え、二日、三日の朝は雑煮、夜はご飯を炊いて供えた。これを神の鉢に毎回順にのせていくのである。

正月気分が朝は少しゆっくりの起床、日の短い時期の夕方は早く、山の神様へ行くのには、四時半頃までに夕飯の支度を終えなくてはならない。なかなか忙しいのだ。

四日の朝、仏様に焼いた餅を二切れ供える。神棚から神の鉢を下げ、仏様から山盛りご飯を下げ、これをおじやにして食べる。棚さがしのおじやと呼んでいるが、これがまずい。なんともおいしくないのだ。

七日の朝は七草粥、私の家ではなすなしか入れないが、おいしくないと不評の食事だ。

先祖から累々と続いてきた行事、特に正月の行事となればなおさらのこと、止める訳にはいかない。

神様、仏様に生かしてもらっている私で

すからと、テレビの中の老婆が、一生懸命に弘法大師を拜んでいた。私もあのきもちをもらって精進しよう。



ますますの枀

田嶋和子

学校から帰ると香ばしい豆の匂いがした。今日は豆まきだ。六畳間の年神様には炒り豆を入れた一升枀が納まっている。角がすり減ったり、傷の間に糠や粉がこびりついている枀。何十年も使いこんだ様子が子供にもわかった。

えびす講の日に、お金を入れてえびす様に上げるのもこの枀だった。ますますお金がたまるように、ますますまめに働けるように、との意味だと聞いたが、家族の働きが足りなかったのか、わが家にお金は集まらなかつたようだ。が、健康で暮らせる日々を見守っていてくれたのかも知れない。

枀(ひいらぎ)と豆幹の先に鯛の頭をつけて出入口にさす行事は、そうしたおまじないの印のようにも思える。自然神への祈りであろう。この枀をもらいに行くのが私の役目だった。(8ページ上段)

(6ページより)

▽Q子:飯能からも犠牲者が出たの?

▼Aおじさん:そう、岩淵村(現飯能市南高麗地区)の小見山貞七(二十六歳くらい)とみられ三人の子がいたと遠藤六右衛門(年齢不詳)の二人が牢死している。二人の墓は岩淵地区の妙円寺門前に村人によって建てられている。

▽Q子:この事件の意味するものはなにかしら。

▼Aおじさん:当時の封建制度(百姓は生かさず殺さず働かせる)の現実を現代人にもごとなまに教えている点で、これほどの教科書は無いのではないか。その点に大きな意味があると思うね。(文責 吉田靖)

§ 新入会員紹介 §

松本英男(日高市武蔵台一四一三)
半田敦史(青木九〇)
相田通子(笠縫四〇九一七)
浅見初枝(虎秀四七七)

(敬称略)

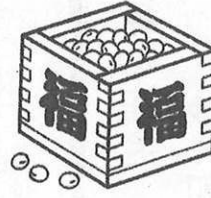
訃報

浅見昌一郎氏 岡野達雄氏

心よりご冥福をお祈りします。

郷土はんのう

一キロほど離れた叔母の家には、井戸のそばに叔母の背と同じくらしいの終があった。小柄な叔母は下の方の枝を挟んで、物置に吊るしてある豆の枝と一緒にして新聞紙に包んで渡してくれた。帰りには白いたんきり飴をひとつ口に入れてもらえる楽しみがあった。



うす暗くなる田んぼの中のいちばん広い道を急いで戻ると、母は大きな鉄なべで、けんちん汁を作り、行商の魚屋で買ったらしい鯛を焼いていた。

換気扇の設備がない狭い部屋の中には魚臭い煙が隅々まで流れまわる。母はこの煙が鬼を追い払うのだよ、といったが、鬼でなくても逃げ出したくなった。焼きあがった鯛の頭を指で折るようになって、豆幹の先にさすとあとは父に頼んで準備を済ませた。

父は店のシャッターをいつもよりはやめにいったん降ろし、一番風呂に入る。ゆかたを重ねた銘仙の丹前に着替え、黒い足袋を履いて身を整えた。

家族の顔ぶれが揃うと、神棚から枡を下げ、年神様から順にいっつかある神棚に向かって豆をまく。座敷にころがった豆は小学生だった弟たちが競争で拾って、モグモグ口へ放りこんでいた。ポケットにもつまこんだ。私も自分の歳よりずっと多く食べた。

神棚が終わると次は外。表のシャッターを半分まで上げて「福は内、福は内、福は内、」と三回。軒を並べている隣のおじさんより、父の張りのある大きな声が頼もしく、うれしかった。福をいっぱい呼んだように思えた。裏口にも同じようにまくと、枡の中の豆はほとんどなくなつた。

この日の夕食は父が好んだちくわの煮物、けんちん汁、鯛、土間の樽で漬けた白菜漬けなど。質素なごちそうだが、それでもふだんとは違うおなかを満たせる物日を心待ちにしていた。

家族中が弾んで参加した豆まきは、もう半世紀も前の光景になつた。節分の声を聞いたが、今では見ることも使うこともなくなつた一升枡が目の底から浮かんでくる。現在、我が家にあるのは一合枡だが、今年はこの中に豆をちよこんと入れて、大きな声は出せないが、私の福を心の中で叫んでまこう。

「若さが、元気が、ますますほしいっ」と。

新年度事業計画
郷土史研
だより

一昨年より隔月の例会を「郷土を知る」「郷土史を学ぶ」というテーマで開催し各地域の歴史にふれようということからはじまりました。
本年も引き続き、各会員の研究発表や体験報告を中心に活動していきます。ふるつ

てご参加ください。会員以外の人にも声をかけご参加お願いします。

◎平成十四年度事業計画(案)

▽総会 四月二十八日

歴史講演会

「中山氏と飯能」

講師 浅見徳男氏

(飯能市教育センター所長)

今回の講演会は、郷土史研、郷土観、郷土館友の会の共催で一般の方々にも参加していただけるよう、広報はんのうに掲載いたしました。

▽例会(隔月土曜日を予定)

○六月「飯能の民家と庭」

講師 丸山 清氏

○八月「高萩の殿様中山氏」

講師 吉田 靖氏

○十月「中山氏の菩提寺智観寺をたずねて」

講師 加藤 義雄氏

○十二月「飯能の明治・大正」

講師 加藤 義雄氏

講師、テーマについては、変更のある場合もあります。会員には事前にお知らせします。

◎平成十三年度事業報告

▽総会四月二十二日(土)

講演会「祭と民俗」講演会

「地口行灯の話」

講師 郷土芸能研究者

石川 博司氏

▽例会

○六月

「伊勢道中参宮日記簿」

講師 増岡 正文氏

○八月 「茗字と地名」

講師 青木 晃平氏

○十月 「黒田氏と飯能」

講師 浅見 徳男氏

○十二月 「絵馬について」

講師 大野 邦弘氏

○二月 「郷土の歴史と社会制度の不思議」

講師 吉田 靖氏

○役員会 平成十四年三月 日、十三年度の事業報告、新年度事業計画を検討。

表紙写真 智観寺山門

智観寺(飯能市中山)は真言宗豊山派に属し、常寂山蓮華院と号す。本尊、不動明王。中山信吉の墓(埼玉県指定史跡)をはじめ中山氏累代の墓所である。中山信吉母木碑県指定をはじめ、仁治二年(一二四二)同三年(一二四三)、永仁六年(一二九八)銘の板碑が残されており、中山氏ゆかりの寺である。

郷土はんのう 第二十二号

発効日

平成十四年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

(〒三五七-〇二二)

飯能市中藤上郷四の三

岸道生方

(電話七七一〇六五四)

題字 大野邦弘

表紙写真 岸道生